をしてゐたか、それは確かなことは申しあげかねるが、恐らく、いろいろの面白くてためになる事柄――たとへば、お天氣のこと、犬のこと、小麥のこと、夜帽のこと、胤馬のこと等々について話がはづんでゐたのに違ひない。やがてのことにイワーノギッチ・イワーノギッチ――例のイワン・イワーノギッチではない、もう一人の方の――が言つた。

「どうも不思議なことで、わたしのこの右の眼に、(片目のイワン・イワーノギッチは、いつも自分で自分のことを皮肉つて喋る人だ。)イワン・ニキーフォロギッチ・ドヴゴチフーン氏の姿が見えないのですがね。」

「來るのが嫌なんですよ！」と市長が言つた。

「どうしてですか？」

「それがですよ、お蔭なことに、あの二人が、つまり、あのイワン・イワーノギッチとイワン・ニキーフォロギッチとがですよ、お互ひに仲違ひをしてからもう二年にもなりますがね、一人の方が出る處へは、どんなことがあつても、もう一人の方がやつて來ないのですよ！」

「これはしたり！　何といふことを仰つしやるので！」から言ひながら、片目のイワン・イワーノギッチは眼を上へあげて、兩手を組みあはせた。「滿足な兩の眼をもつてゐる人たちが仲よくやつてゆかれないとしたら、この片目のわたしなど何うして平和な生活が送れませう！」

この言葉に一同はどつと聲をあげて笑つた。片目のイワン・イワーノギッチは、かうしたしつ

くりと時宜に適した洒落をいふので皆から好かれてゐた。で、バイカのフロックを著こんで、鼻の頭に膏藥を貼つた、のつぽで痩せんぼの一人の男は、この時まで隅つこにツクネンと坐つたまま、蠅が一羽その鼻の孔へブーンと飛びこんだ時でさへ、顏の筋ひとつ動かさないでゐたが、――他ならぬこの紳士までが、自分の席を立つて、片目のイワン・イワーノギッチを取りまいた群集の近くへにぢりよつたものである。

「まあお聽きなさい！」と、片目のイワン・イワーノギッチは、自分のぐるりにかなり多勢の人が集まつたのを見て、言葉をつづけた。「まあお聽きなさい、みなさん、あなた方がこのわたしのめつかちの顏をじろじろ眺めておいでになる代りにですよ、そんな暇があつたらですな、一つわれわれの親友たちを仲直りさせようぢやありませんか！　ちやうど今、イワン・イワーノギッチは御婦人方や娘さんたちと話しこんでござるから、こつそり、イワン・ニキーフォロギッチを呼びにやつて、二人をいつしよに押しつけようぢやありませんか。」

一同は擧つてイワン・イワーノギッチの提案に贊成した。で、即刻イワン・ニキーフォロギッチの家へ使をやつて、是が非でも市長の午饗會の席へ出てくれるやうに賴まうといふことに協議がまとまつた。ところが、この重大な使命を何人に委任すべきかといふ大問題に逢著して、一同はハタと當惑した。長いこと、誰が一體この外交的方面に最も適任者であり、且つ敏腕家である

＊註　粗羅紗の一種。〔譯者〕

かといふ點で、議論が戰はされたが、その結果、アントン・プロコーフィエギッチ・ゴロブージにこの大役を一任しようといふことに衆議が一決した。

だが、茲で讀者にこの重要な登場人物を御紹介しておく必要がある。アントン・プロコーフィエギッチは善良といふ言葉のもつあらゆる意味に於ての徹底的な好人物であつた。ミルゴロドの尊敬すべき紳士の誰かが、頸まき用のハンカチか、下著のやうな物を吳れてやると、彼はお禮を言ふ。誰かが彼の鼻を爪はじきしても、やはりお禮をいふ。また、誰かが彼に『アントン・プロコーフィエギッチ、あなたのフロックコートは肉桂いろなのに、袖だけが空いろなのは、いつたい何うした譯ですか?』と訊いたりすると、彼はいつでも、『ああ、あなた方のはこんなぢやありませんね！　まあ、少し待つてゐて下さい、もうちよつと著古しさへすれば、全部おんなじになりますからね！』と答へたものである。まさしくそのとほりで、空いろの羅紗が日光の作用で肉桂いろに變色しはじめ、今ではすつかり、胴の色と同じくらゐになつてゐるのだ。だが茲に不思議なのは、アントン・プロコーフィエギッチは羅紗地の服を夏に著て、南京木綿の服を冬分用ひる習慣を持つてゐることである。アントン・プロコーフィエギッチには自分の家といふものがなかつた。以前には市端(まちはし)れに一軒を持つてゐたのだが、彼はそれを賣り拂つて、手に入れた金で栗毛の馬を三頭と、小さい半蓋馬車(ブリーチカ)とを買ひこみ、それに乘つて地主の家から地主の家へと乘り廻してゐたものである。が、馬にはいろんな心づかひをせねばならず、おまけに燕麥を買ふに金が

かかるといふんで、アントン・プロコーフィエギッチは二十五留紙幣(ルーブリ)を一枚だけ追ひ錢に取つて、一挺のヴァイオリンと女中とに、それを交換してしまつた。その後、アントン・プロコーフィエギッチは、そのヴァイオリンも賣り拂ひ、女中は黃金(きん)金具のついたモロッコ皮の葉卷入れと取り換へた。そんな次第で彼の手許には、誰も持つてゐないやうな素晴らしい葉卷入れがあるのだつた。かういふ道樂のお蔭で、もはや彼は村から村へと乘りまはすことも出來なくなり、市(まち)にゐのこつて、あの家この家と、殊に彼の鼻の頭を爪彈きすることの好きな貴族たちの家々を、泊り歩かなければならないのである。アントン・プロコーフィエギッチは鱈腹つめこむことが大好きで、(阿房(ドウラーク))や(粉磨(メリニツク)き)も、なかなか巧くやつてのける。何時でも他人の言葉に從ふことが彼の本性だつた。で、彼は帽子とステッキをおつ取りざま、早速出かけたのである。

だが、テクテクと道を辿りながらも、どんな具合にイワン・ニキーフォロギッチを招待會へ引つぱり出したものだらうと、とつおいつ思案にふけつた。それにしても、くだんの尊敬すべき人物の、少しばかり變窟な氣性を考へると、彼の計畫はほとんど不可能なことのやうにも思はれた。それに第一、寢床から起きあがるといふことが既に非常な努力であるやうな人物に、果してわざわざ出かける決心がつくだらうか？　よし寢床からは起きあがつたにもしろ、不倶戴天の仇敵が行つてゐるに違ひない——そのことは疑ひもなく知つてゐるはずだ——そんな場所へ、どうして彼がのこのこと出かけてゆくものか？　深く考へれば考へるほどアントン・プロコーフィエギッ

チはますます多くの障害を發見した。それは蒸暑い日で、天日がじりじりと燒きつけて、汗が玉になつて五體を流れた。アントン・プロコーフィエギッチは、人から鼻の頭を爪はじきされるやうな男ではあつたが、いろんな點で相當こすい人物だつた。ただ交換の場合だけは、あまり惠まれてゐなかつた。彼は馬鹿を裝ふ必要のある場合をよく心得てゐた。そして利巧な人々でもちよつと切りぬけかねるやうな情勢に遭遇しても、屢〻それを免れることが出來た。

で、彼の當意即妙な頭に、如何にしてイワン・ニキーフォロギッチを說伏すべきかといふ名案が浮かんだので、もはや勇敢に凡てにぶつかつて行かうと、大手を振つて歩き出した、ちやうどその時、或る思ひがけない事故が出來して、若干彼の心を動亂させた。玆でちよつと讀者に御披露しても妨げでないと思ふが、アントン・プロコーフィエギッチの所持品の中に恐ろしく不思議な性質の細洋袴（パンタローン）が一足あつて、それを穿いて出ると彼は何時もきまつて腓（こむら）を犬に嚙みつかれるといふことなのである。因果なことに彼はこの日、まさしくその細洋袴（パンタローン）をはいてゐたのだ。で、彼がやうやく沈思默考に身を委ねたばかりのところで、四方八方から物凄い犬の吠聲が湧き起つて彼の耳を驚ろかした。アントン・プロコーフィエギッチは凄まじい金切聲をあげたものだ（これより大きい叫び聲は何人にも出せるものではない。）から、例の老婢と、あの不釣合ひなフロックの中の住人とが、彼を迎へに駈け出したばかりか、隣りのイワン・イワーノギッチの邸からまで腕白どもが飛びだして來たくらゐだ。で、犬どもはほんの彼の片方の脚にだけしか嚙みつくこと

が出來なかつたけれど、然しそのために彼の勇氣はすつかり挫けて、妙に怯（おじ）けた氣持を抱いて玄關へ近づいて行つた。

第七章
いよいよ最後の章

「やあ今日は！　なんであんたは、犬など揶揄（からか）ひなさるんで？」イワン・ニキーフォロギッチはアントン・プロコーフィエギッチの姿を見るとかう聲をかけた。アントン・プロコーフィエギッチを相手にする場合には、誰でも冗談まじりの調子でしか話しかけなかつたからである。

「誰が揶揄（からか）ふものですかい！　畜生ども、みんな斃（くたば）つてしまへばいいのに！　まつたく！」と、アントン・プロコーフィエギッチが答へた。

「嘘をおつしやい。」

「いんにや、誓つて、からかつたんぢやありませんよ！　時にピョートル・フョードロギッチが是非とも、あなたに午饗にいらしつて下さるやうにといふんですがね。」

「ふうん！」

「いや、ほんとですよ！　とても、お話にならんくらゐ熱心にお待ちしてゐるんです。（どういふ理由（わけ）でイワン・ニキーフォロギッチは、まるで仇敵のやうにわたしを避けてをるのだらう？　話

しにも遊びにも、頓と穴のぞきもしないなんて。)と、そんなに言つてるんですよ。」

イワン・ニキーフォロギッチは頤を撫でまはした。

「かういふんです、(萬一けふも、イワン・ニキーフォロギッチが來てくれないとすれば、これは屹度わたしに何か意趣遺恨があつてのことと考へる他はありませんよ！ 濟まないが、アントン・プロコーフィエギッチ、一つイワン・ニキーフォロギッチによく話して來て呉れ給へ！) つてね。どうです、イワン・ニキーフォロギッチ、參りませうよ！ あすこには今日、とても素晴らしい會合が催されてをりますんで！」イワン・ニキーフォロギッチは、入口の階段の上で力限り咽喉を張つてときをつくる雄鷄をまじまじと眺めはじめた。

「イワン・ニキーフォロギッチ。」と、職務に忠實な特派使節は言葉をつづけた。「あなたがあのピョートル・フョードロギッチのところへ、どんな素晴らしい鱈魚(てふぎめ)と、それから、どんなに新らしい醃鯽(イクラ)が屆けられてゐるかつてことを御存じでしたらなあ！」

それを聞くと、イワン・ニキーフォロギッチはこちらへ向きなほつて、じつと聽き耳を立てた。

それが特派使節を勇氣づけた。『さあ、早く參りませうよ。フォマ・グリゴーリエギッチも來てゐますよ！ どうしたんです？』と、イワン・ニキーフォロギッチが依然として同じ姿勢で寢そべつてゐるのを見て、彼は言ひ足した。『どうしたんです？ 參りませうよ。それとも、おいでになりませんので？』

「嫌です！」

この(嫌です)がアントン・プロコーフィエギッチを面喰らはせた。彼はもう自分の熱心な勸請が、この手剛ひ相手を完全に說伏したものと思つてゐたのだ。それだのに、反對にきつぱりしたこの(嫌です)のお見舞ひを受けたのだから、面喰らはざるを得ない譯である。

「どうして又、お嫌なんです？」かう彼はほとんど腹立たしさうな調子で訊ねた。かういふことは彼には極めて稀らしいことで、火をつけた紙を頭へのせられるやうな時でも、——それは殊にあの裁判所長と市長とが、慰み半分に好んでする惡戲なんで——そんな時でも、滅多に見せない態度であつた。

イワン・ニキーフォロギッチは嗅煙草を嗅いだ。

「そりやあ、あなたの御自由ですけれどね、イワン・ニキーフォロギッチ、わたしにはどういふお差しつかへがあつてお出かけになれないのか、頓と呑みこめませんので。」

「どうして行かれますかい？」と、やがてのことに、イワン・ニキーフォロギッチが口をきつた。

「あそこへは、あの泥棒野郎も行きませうが！」彼はイワン・イワーノギッチのことを、つねに泥棒と呼んでゐるのだ……。公明なる神よ！ つい先きごろまでは何うだつたか……。

「いや、斷じて、あの人は行きません！ 聖なる神に誓つて、あの人は行きやしませんよ！ これが嘘なら、現在この場で、わたしは雷に打たれたつて構ひません！」かう、一時間のあひだに

十度でも誓ひをたてる用意の出來てゐるアントン・プロコーフィエギッチが答へた。「さあ、參りませう、イワン・ニキーフォロギッチ！」

「嘘をついてなさるのでせう、アントン・プロコーフィエギッチ、奴はあすこへ行つてをるのでせうが？」

「斷じて、斷じて、そんなことはありません！　もしあの人が行つてゐるやうなら、わたしの五體がこの場から離れなくなつても構ひませんよ！　まあちよつと考へても見て下さい、何のあてがあつて、そんな嘘をわたしが申しませう！　手足が干乾びてしまつても構ひませんよ！　どうです、まだ御得心がまゐりませんか？　この場で、あなたの目の前で斃(くたば)つてしまつても構ひませんよ！　親爺も、お袋も、わたし自身も、天國へ行かれなくなつても構ひません！　これでもまだ御信用になれませんか？」

イワン・ニキーフォロギッチは、これだけ固く保證されたので、すつかり安心して、くだんの際限もなく長いフロックコートを著こんだ從僕を呼んで、寬袴(シャロワールイ)と南京木綿の哥薩服(コザキン)とを持つて來させた。

どんな風にして、イワン・ニキーフォロギッチが寬袴をはき、ネクタイを卷きつけて貰ひ、最後に左の袖の下の破れた哥薩服を著こんだかといふことを、くだくだしく詳述するのは、まつたく餘計なことだと思ふ。彼がこの間ぢゆう行儀よく平靜を保つの餘り、アントン・プロコーフィ

エギッチが、自分の土耳古製の煙草入れと、何かと交換しようと申し入れたのに對して、一言の返事もしなかつたことを、述べるだけで澤山だらう。

一方、會合の方では、イワン・ニキーフォロギッチがいよいよ登場して、尊敬すべき二人の人物が和解するといふ、一同の最後の希望が實現されるギリギリ結着の瞬間を、今や遲しと待ちかまへてゐた。大多數の者は、イワン・ニキーフォロギッチはやつて來ないだらうと決めこんでゐた。市長などは、やつて來ないといつて、めつかちのイワン・イワーノギッチと賭までやつたものである。だが、その賭は途中でお流れになつてしまつた。といふのは、めつかちのイワン・イワーノギッチが、市長には例の貫道銃創のある片脚を賭けさせ、自分はめつかちの眼を賭けることにしようと言ひ出したため、市長がひどく機嫌を損ねてしまつたからである。しかし一座の人々はくすくす笑つたものだ。もう疾うに一時を廻つてゐたが、誰ひとり食卓につく者はなかつた。それは當ミルゴロドでは、正式の場合でさへ、疾つくに午饗の終つてゐる時刻なのである。

アントン・プロコーフィエギッチが戸口へ姿を現はすや否や、忽ち一同は彼を取りかこんでしまつた。アントン・プロコーフィエギッチは一同の質問に對して、ただ一言、きつぱりと、『來ません！』と叫んだ。彼がこの一言を口外するや、その特派使節としての使命の失敗に對して、譴責と罵詈の急霰が、いやそれどころか、罷り違へば鐵拳のお見舞ひまでが、將に彼の頭上に落下しさうな形勢になつた。ちやうどその時、突然、扉がさつとあいて、當のイワン・ニキーフォロ

ギッチがひよつこりと入つて來たのである。

たとへ、惡魔そのものか亡者が姿を現はしたにしても、イワン・ニキーフォロギッチの、この思ひがけない入來が全會衆に與へたほどの驚愕は引き起さなかつたであらう。ところで、アントン・プロコーフィエギッチはうまく一同をかついだことが嬉しくて嬉しくて、ただもう腹を抱へて笑ひころげるばかりであつた。

それは兎も角、イワン・ニキーフォロギッチがこんな短時間に、貴族として恥かしからぬ身仕度をととのへることが出來たといふ、そのことだけでも、一同にとつては、ほとんど信じ難い事實だつた。ちやうどその時、イワン・イワーノギッチはその場にゐあはせなかつた。何か用があつて彼は席を外してゐたのだ。やうやく驚愕から覺めると、一同はイワン・ニキーフォロギッチの健康を訊ねたり、彼が一層肥滿したことに祝意を表したりした。イワン・ニキーフォロギッチは一同と接吻を交はして、『いや、おほきに、お蔭様で。』と言つた。

兎や角するうちに甜菜汁（ボールシチ）の匂ひがプーンと部屋へ漂つて來て、お腹を空かした客人たちの鼻の孔を氣持よく擽つた。一同は崩雪をうつて、食堂へと殺到した。口輕な女、默りやの女、痩せた女、肥つた女――さういつた樣々な婦人連の行列が先頭に立つて進んだ。そして長い長い食卓はありとあらゆる色彩でごつた返した。だが、どんな料理が食卓へ出たか、それをくどくどと書きたてるのは見合はせよう！　酸乳脂（スメターナ）入りのムニーシュキ*についても、甜菜汁（ボールシチ）に添へて出されたウ**

トゥリーブカについても、乾梅と乾葡萄を詰めた七面鳥についても、濁麥酒（クワス）にひたした、長靴の恰好よろしくの料理についても、古風な料理人の《白鳥の歌》であるソース――それは酒の焰につつまれて供されたので、ひどく婦人連を興がらせると同時に驚ろかしたものだ――についても、何も言はないでおかう。かうした御馳走の話をすることは御免を蒙りたい。何故といつて、かういふ話をだらだらと述べたてるよりは、いつそそれをバクついた方が、わたしには遙かに好もしいからである。

イワン・イワーノギッチには山葵（わさび）を添へた魚がひどく氣に入つた。彼はこの、滋養に富んで健康によい料理を、特別念入りに賞味してゐたが、非常に細かい魚の小骨を選り出して、それを皿の緣へ置く拍子に、何氣なくヒョイと眞向ひの席を見た。おお、天なる創物主（つくりぬし）よ！　何といふ奇態なことがあるものだ！　彼とあひ向ひに坐つてゐるのが、イワン・ニキーフォロギッチであらうとは！

そのおなじ瞬間に、期せずしてイワン・ニキーフォロギッチの方も顏をあげた！……いけない！……とても駄目だ！　別のペンをかして下さい！　このちびた、死んだ、割目の細い、わたしのペンではとてもこの大がかりな畫面は描ききれない！　二人の顏は驚愕を反映して、化石し

* 註　麥粉に凝乳を混じて製したるもの。〔譯者〕

** 註　羊の內臟より製したもの。〔譯者〕

たもののやうになつてしまつた。彼等は互ひに古い馴染の顔を見あはせて、思ひがけない親友に會つた嬉しさに、知らず知らず喫煙草入をさし出して、《一服如何で？》とか、《失禮ですが、一服召しあがつて戴けませんか？》とか、今にも言ひさうな表情を浮かべたのだが、それと同時に、その同じ顔が何か不吉な前兆のやうに險惡でもあつた！　汗が玉をなして、イワン・イワーノヴィッチの軀からも、イワン・ニキーフォロヴィッチの軀からも、タラタラと流れた。

會合に出席して、食卓についてゐたほどの人はすべて、氣を呑まれて、啞者のやうに押し默り、かつては無二の親友であつたこの二人から眼を離すことが出來なかつた。この時まで、鷄の去勢はどんな風にして行ふかといふ、かなり面白い話に身を入れてゐた婦人連も急に口を噤んだ。すべてがシーンと鎭まりかへつた！　それは正しく偉大なる美術家の畫筆に値する光景だつた。

つひに、イワンイワーノヴィッチはハンカチを取りだして鼻をかみ始めた。イワン・ニキーフォロヴィッチの方は、ぐるりと四方を見まはして、開けはなしになつてゐる戸口に眼をとめた。逸早くもこの動作を見てとつた市長は、扉を固く鎖すように命じた。そこでこの二人の親友はめいめい食事をやりだしたが、最早、二度とお互ひの顔を見交はさなかつた。

午餐が終るや否や、かつては無二の親友であつた二人は席を立つて、こつそり逃げ出すつもりで各自の帽子を捜しはじめた。そこで市長が目くばせをした。すると、イワン・イワーノヴィッチ――當のイワン・イワーノヴィッチではない、もう一人の、めつかちの方の――が、イワン・ニキー

フォロヴィッチの背後に立ち、市長自からはイワン・イワーノヴィッチの背後へ廻つて、二人を一緒に押しつけて彼等が互ひに手を差しのべるまでは放すまいと、うしろから兩人を押しよせにかかつたのである。めつかちのイワン・イワーノヴィッチはすこし斜ではあつたけれど、それでもかなり巧く、イワン・ニキーフォロヴィッチを押しやつてゐる見當へ、イワン・ニキーフォロヴィッチを押しやつた。ところが市長の方は、この期に及んで何としても指揮に從はず、故意とのやうに、まるで方角ちがひの見當へ途方もなくひよつこり飛びだしてしまふ（それは恐らく、食卓へ出た種々樣々な浸酒が原因をなしたものと思はれるが）くだんの我儘な《歩兵》をどうにも旨く制御することが出來ず、恐ろしく外方へ押しやつたため、イワン・イワーノヴィッチは、物好きにも眞只中へ出しやばつて、この樣子を見てゐた、眞赤な着物を著た婦人にぶつかつてしまつた。かうした前觸は好結果を暗示しなかつた。とはいへ、この情勢を收拾するために裁判所長が市長の位地に立つた。彼は先づ例の鼻で、上唇に溜つてゐた煙草をすつかり吸ひこんでおいて、イワン・イワーノヴィッチを反對側へ押しやつた。これが、普道にミルゴロドで行はれてゐる仲裁の仕方なのである。それはいくらか蹴球の遊戯に似てゐる。裁判所長がイワン・イワーノヴィッチを突き出すと同時にめつかちのイワン・イワーノヴィッチは全力をこめて、まるで雨水が屋根をくだるやうにタラタラと汗を流してゐるイワン・ニキーフォロヴィッチを押し出した。二人の親友は頑强に抵抗したけれどだんだん押し寄せられてしまつた。それといふのも、それぞれ双方の押し手へ、他の客の側から

有力な應援が加はつたからである。

そこで人々は四方八方から二人を拉々と取りかこんでしまつて、二人が互ひに手をさしのべる決心をするまでは、その圍みを解かうとはしなかつた。『實に呆れたものですよ、イワン・イワーノヴィッチにイワン・ニキーフォロヴィッチ！　いつたい、何で仲違ひをなすつたのか、良心にかけて話して下さい！　實にくだらないことからぢやありませんか！　ほんとに、よくもあなた方は、人の前にも、神様の前にも、恥かしくないんですねえ！』

「わつしやあ知りませんよ。」と、イワン・ニキーフォロヴィッチは、困憊のためにハアハアと息をはづませながら言つた。（彼が和睦をひどく拒んでゐないことが觀取された。）「わたしには、いつたいイワン・イワーノヴィッチに何んなことをわたしがしたのか、さつぱり分らないのです。何のために、この人はわたしの家の家畜小舎を挽き倒したり、わたしを破滅させようと企らんだりしたのです？」

「わたしは絶對に悪だくみなどした覺えはありませんよ。」と、イワン・イワーノヴィッチはイワン・ニキーフォロヴィッチの顏を見ないで言つた。「神様の前に、そしてあなた方、榮譽ある貴族諸君の面前において誓言します。わたしは、わたしの仇敵に對して、何にもした覺えはありません。それだのに何でこの仁は、わたしを誹謗したり、わたしの身分にかかはるやうな危害を加へたりするのですか？」

「いつたい、どんな危害をわたしが加へましたね、イワン・イワーノヴィッチ？」と、イワン・ニキーフォロヴィッチが言つた。もう一息の辯解で久しい間の敵意が氷解しさうになつて來た。既にイワン・ニキーフォロヴィッチは（一服如何で？）と侑めるために嗅煙草をさし出さうとして衣嚢へ手を突つこんでゐた。

「あれが危害でないでせうか」と、イワン・イワーノヴィッチは顏をあげないで、答へた。「あなたは、今ここで口外することも出來ないやうな尾籠な言葉で、わたしの身分と家名とを侮辱なすつたぢやありませんか？」

「友達として申しあげますよ、イワン・イワーノヴィッチ！（かう言ひながらイワン・ニキーフォロヴィッチはイワン・イワーノヴィッチの釦に指を觸れた。これはまつたく、彼の機嫌の直つた徵しであつた。）「あなたは、あんなくだらないことで、氣を悪くしていらつしやるのですか？　ただわたしが一言、あなたを（鷺鳥の雄）だと言つたことぐらゐで……」

この一言を口へ出してしまつてから、イワン・ニキーフォロヴィッチは飛んだ粗忽をして退けたと氣がついた。しかしもう遲かつた。致命的な一語はすでに口から出てしまつてゐた。何もかもがおぢやんになつてしまつた！　誰も聞いてゐる者のない時でさへ、この一語の口外のために、あんなにカンカンに逆上して恐ろしい嗔恚のとりことなつたイワン・イワーノヴィッチだ。――それが今度はどうだらう、親愛なる讀者諸君、まあ考へても見て下さい、この致命的な一言が集會

の席上で、しかも其處にはイワン・イワーノギッチが殊に自分を禮儀正しく示したいと思つてゐる多數の婦人が列席してゐる滿座の中で口外されたのではないか！ イワン・ニキーフォロギッチがこんな風に言はずに、(鷺鳥)といふ代りに、せめて(鳥)とでも言つたのなら、まだしも繕ひやうもあつたらうに。されど、萬事休すだ！

彼はイワン・ニキーフォロギッチにジロリと一瞥を投げた。——しかも、何といふ物凄い一瞥だつたらう！ もし、その一瞥に實行力が賦與されてゐたなら、イワン・ニキーフォロギッチは立ちどころに灰燼と化してしまつてゐただらう。客人たちはこの一瞥を見て取つて、急いで二人を引きわけた。すると、どんな女乞食でも一人一人、その身の上を訊ねずには見逃すことの出來ないといつた、まるで慈悲心の權化ともいふべきこの人物は、恐ろしく激怒して、その場を飛び出して行つてしまつた。煩惱といふものは時にはかうした凄まじい暴風雨を捲き起すのである！

まる一と月の間、イワン・イワーノギッチに關しては、何の消息もきかれなかつた。彼は自分の家に閉ぢこもつてしまつたのである。例の秘藏の長持があけられた。そしてその長持の中から何が取りだされたであらう？ それは留銀貨だつた！ 古い古い、祖父の時代の留銀貨だつた！ そしてこの留銀貨はインキに汚れた代書人の手へ渡つたのである。事件は控訴院へ移された。そして明日その判決が言ひ渡されるといふ吉報を受けとつた時、初めて、イワン・イワーノギッチは戸外をのぞいてみて、家から外へ出る氣になつた。だが何たることだ！ その時以來、控訴院

は來る日も來る日も、判決は明日だとばかり報告し續けて、そのまま既に十年もの歳月が經過してしまつたのである。

ちやうど五年ほど前のこと、わたしはミルゴロドを通つたことがあつた。折柄ひどく惡い季節だつた。それは物悲しく、じめじめした天候と、泥濘と、霧の打ちつづく秋だつた。何か不自然な青草——それは退屈な、やみ間なき秋雨の創造物だつた——が、薄い網か何ぞのやうに、田畠を蔽ひ、老人に狂態、老婆に薔薇の花といつた不自然さで、へばりついてゐた。その時、わたしほひどく天候に影響されて、天氣が陰鬱で退屈なやうに、わたしも陰鬱で、退屈だつた。が、それにも拘らず、ミルゴロドへ近づくにつれて、わたしは怪しくも、胸の高鳴りを覺えたものだ。おお何と數々の想ひ出の秘められてゐることよ！ わたしは丁度十二年、ミルゴロドを見なかつた。あの頃、この市には、世にも稀な二人の人物が、又とない二人の親友が、涙ぐましいほどの友愛に結ばれて住んでゐたつけ。だが、知名な人々の幾人もが今は亡くなつてゐた！ 裁判所長のデミヤン・デミヤーノギッチは既に故人だつた、めつかちのイワン・イワーノギッチも亡き人の數に入つてゐた。わたしは目抜きの大道りへ乘りこんで行つた。到るところに、藁束を先端に結びつけた竿が立つてゐた。何か新らしい地盛りが行はれてゐるのだ！ 幾軒かの農家が取り拂

はれてゐた。木柵や籬の殘骸が蕭條として取り殘されてゐた。

その日は祭日だつた。わたしは寺院の前で、蓆を掛けた幌馬車を停めて、誰にも氣づかれないくらゐ靜かにこつそりと堂内へ入つて行つた。そして實際、誰ひとり氣づく者はなかつた。寺の中はひつそりかんとしてゐた。ほとんど誰ひとりゐないのだつた。最も信心ぶかい人達までがこの泥濘には辟易したものと見える。幽暗の中に、といふよりは傷ましさの奥底に、ともされた蠟燭の灯は妙に不氣味だつた。うす暗い入口も物悲しげであつた。丸い硝子のはまつた細長い窓はしぶきの涙に濡れそぼれてゐた。わたしは入口へ引つかへして、一人の上品な白髪の老人にむかつて、『ちよつとお訊ねしますが、イワン・ニキーフオロギッチはまだ御存命でせうか?』と訊いた。この時、聖像の前の燈明の灯がパッと燃えたつて、その光りがわたしの傍にゐた老人の顔をまともに照らした。よく見れば、驚ろいたことに見憶えのある顔ではないか! それが、他ならぬイワン・ニキーフオロギッチだつたのだ! だが、何といふ變り方だらう!

「まあ、お達者でしたか、イワン・ニキーフオロギッチ? 何といふお齡を召したことでせう!」

「はい、齡をとりましたわい! 實はけふ、ポルターワから戻つて來ましたところでな!」さうイワン・ニキーフオロギッチが答へた。

「何ですと! こんな酷い天氣に、ポルターワへお出かけになつたんですつて?。」

「仕方がありませんて! 訴訟がな……」

それを聞いて、わたしは思はず溜息をついた。

イワン・ニキーフオロギッチは、その嘆息をきき咎めて、かう言ふのだ。『いや、御心配くださるな、あの事件は來週、有利な判決が下るといふ確かな情報を得てゐますからな。』

わたしは思はず肩をすぼめた。そして、イワン・イワーノギッチの安否を知らうと思つて、歩を進めた。

「イワン・イワーノギッチなら、此處にゐますよ!」と、誰かがわたしに言つた。「あの人は頌歌席にをります。」

わたしはその時、痩せさらばうた人の姿を見つけた。これがイワン・イワーノギッチだらうか? 顔は皺だらけで、頭髪はすつかり白かつた。が、ペケーシャだけは、やはり以前のままの品だつた。先づ久濶を敍して挨拶をすると、イワン・イワーノギッチは、その漏斗形の顔にふさはしいいつもの嬉しさうな微笑を浮かべながら、わたしの方を顧みて言つた。『愉快な新報をお傳へしませうかな?』

「どんな新報ですか?」と、わたしが訊ねた。

「明日は間違ひなく、例の一件が決審になりますよ。控訴院から確かな通知がありましてな。」

わたしは一層ふかく長大息を漏らした。そして、とり急ぎ、別れを告げた——わたしは非常に重大な用件を帶びて旅をしてゐる矢先だつたので——そして、幌馬車の中に坐つた。

ミルゴロドで《飛脚》といふ名で通つた痩馬どもが、灰いろを帶びたひどい泥濘の中へ埋まる蹄を引きぬくたんびに聞くも不快な音を立てながら駈けた。雨は烈しく、蓑をかぶつて馭者臺に坐つてゐる猶太人の上に降りそそいだ。わたしは濕氣が軀ぢゆうに滲みとほるやうに感じた。一人の癈兵がしきりに灰いろの武具を繕つてゐる、哨舍のある、みじめな關門も徐々に通りすぎた。再び前と同じ野原だ。ところどころ堀り返されて黑く、又ところどころ青みを帶びた野原、濡れしよぼれた白嘴鳥に大鴉、千遍一律な雨、雲の切れ目もない泣きつ面の空だ——浮世は退屈ですねえ、諸君！

——一八三三年作——

□此の文庫は、內容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價（錢）	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料（錢）	三	六	六	六	九	九	一二	一四

昭和十三年四月二十一日印刷
昭和十三年四月二十四日發行

改造文庫　第二部　第三百二十八篇
ミルゴロド（短篇集）
定價四十錢

譯者　平井肇
發行者　山本三生　東京市芝區新橋七丁目十二番地
印刷者　青野仙吉　東京市芝區田村町四丁目二番地
版權所有

（長谷部製本）

（青野印刷所）

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝（43）一一一一番　一一一二番　一一一三番　一一一四番

改造文庫第一部目錄

國富論(上卷)アダムスミス著 竹内謙二譯 8
國富論(中卷)アダムスミス著 竹内謙二譯 6
國富論(下卷)アダムスミス著 竹内謙二譯 6
人口論(上卷)マルサス著 松本信夫譯 5
人口論(中卷)マルサス著 松本信夫譯 5
人口論(下ノ一)マルサス著 松本信夫譯 5
人口論(下ノ二)マルサス著 松本信夫譯 4
經濟學原理 デヴド・リカアド著 (近刊)
經濟學原理(上卷)スチユアト・ミル著 (近刊)
經濟學原理(下卷)スチユアト・ミル著 (近刊)
經濟學方法論 カール・メンガー著 (近刊)
經濟學原理 ヂエボンス著 (近刊)
社會主義の發展 エングルス著 堺利彦譯 1
マルキシズム論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
認識論
マルクスの歷史、社會並に國家理論(上卷) クノー著 石川・別府共譯 6
マルクスの歷史、社會並に國家理論(下卷) クノー著 鳥海・森谷・宿島譯 7
マルキシズム 國家觀 アドラー著 山本・星譯 5
マルクス主義經濟學 河上肇著 3
哲學概說 桑木嚴翼著 3
現代哲學思潮 桑木嚴翼著 5
宗教及び信仰の起源 クノー著 玉城肇譯 3
カントの平和論 朝永三十郎著 2
近代資本主義發達史論(上) ホブソン著 住谷・阪本・松澤譯 4
近代資本主義發達史論(下) ホブソン著 住谷・阪本・松澤譯 5
カウツキー夫妻への手紙 ルクセンブルグ著 濱野・正一譯 4
レーニンの唯物辯證法 デボーリン著 佐多忠隆譯 2
天才論 ロンブロオゾオ著 辻潤譯 5
佛蘭西革命史(上) クロポトキン著 淡徳三郎譯 5
佛蘭西革命史(下) クロポトキン著 淡徳三郎譯 5
無政府主義と社會主義 プレハノフ著 百瀬二郎譯 2
財產進化論 ラフワルグ著 荒畑寒村譯(絕版)
帝國主義論 レーニン著 岡田宗司譯(絕版)
帝國主義論 ホブソン著 石澤新二譯 5
勞働價値說の擁護 ヒルファディング著 塚本三吉譯 2
經濟地理概論 ブレブス・リーグ編 菊川忠雄譯 3
帝國主義發達史論 ブレブス・リーグ編 内田佐久郎譯 3
プレブス經濟學 ブレブス・リーグ編 田所輝明譯 3
心理學概論 ブレブス・リーグ編 小宮義孝譯 3
社會意識學概論 ボグダーノフ著 林髞譯 4
經濟科學概論 ボグダーノフ著 林・木村共譯 5
歐洲文學發達史 フリーチエ著 外村史郎譯 6
英國勞働運動史 ブレブス・リーグ編 稻岡進譯 3
我等の對立 ブレハーノフ著 竹尾弐譯 2
マルキシズム方法論 アドラー著 蘆田次郎譯 4
倫理と唯物史觀 カウツキー著 堺利彦譯 2
社會進化と生物進化 荒畑寒村譯(絕版)
原始財產 ラヴレー著 長野肇一郎譯 6
唯物論と經驗批判論(上) レーニン著 山川・大森譯(絕版)
唯物論と經驗批判論(下) レーニン著 山川・大森譯(絕版)
ドイツ古典哲學の進步性 ハイネ著 要原・高沖共譯 3
社會主義への道 ブハーリン著 大橋積譯 2
社會ファシズム論 ラピンスキー著 田中勝太郎譯 3
阿片溺愛者の告白 クインシイ著 辻潤譯 2
建築と繪畫 ラスキン著 内田佐久郎譯 5
藝術とは何ぞや トルストイ著 木村毅譯 3
藝術哲學 植田壽藏著 (近刊)
プロレタリア文學論 コーガン教授著 昇曙夢譯 3
マルクス=エンゲルス傳 リヤザノフ著 堺利彦譯 (近刊)
近代の戀愛觀 厨川白村著 3
象牙の塔を出て、苦悶の象徵 厨川白村著 4
十字街頭を往く 厨川白村著 3
近代文學十講 厨川白村著 5
英詩選釋 厨川白村著 4
ヘーゲル精神哲學概要(上) フイシエル著 田村貞譯 6
ヘーゲル精神哲學概要(下) フイシエル著 田村貞譯 6
辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯(絕版)
哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯(絕版)
神と國家 バクーニン著 本庄可宗譯 1
婦人論 ベーベル著 山川・菊榮譯 6
古代社會(上卷) モルガン著 荒畑寒村譯(絕版)
古代社會(下卷) モルガン著 荒畑寒村譯(絕版)
エミール(上卷) ルソー著 内山賢次譯 4
エミール(下卷) ルソー著 内山賢次譯 4
國家論 オッペンハイマー著 廣島定吉譯 2
金融資本論 猪俣津南雄著(絕版)
日本開化小史 田口卯吉著 2
日本經濟論 田口卯吉著 1
日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 瀧本誠一著 2
日本商業史 横井時冬著 4
日本工業史 横井時冬著 4
經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
リッケルト論文集 リッケルト著 2
文學論 ハックスレイ著 上田勤譯(近刊)
女工哀史 細井和喜蔵著 4
婦人解放論 スチユアト・ミル著 (近刊)
社會進化と婦人の地位 ラッパポート著 山川・菊榮譯 2
近代科學と唯物論 エリオット著 山川均譯(絕版)
農村問題 レーニン著 荒畑實譯 3
勞働組合論 レーニン著 藤井米藏譯 3
幸德秋水集 幸德秋水著 2
中江兆民集 中江兆民著 2
財產起源論 レヴインスキー著 曹島克己譯 1
組織論 レーニン著 鈴木厚譯 3
三民主義 孫中山著 金井寛三譯 3
唯一者とその所有 スティルネル著 辻潤譯 6
世事見聞錄 武陽隱士著 本庄榮治郎校訂 4
近世封建社會の研究 本庄榮治郎著 2
金融資本論 全ヒルファディング著 林髞譯 7
我國近世の農村問題 本庄榮治郎著 3

ドイツ史　メーリング著　栗原佑譯　5
宗教科學鬪爭史　ドレーパー著　荒畑勝三譯（絶版）
中產階級史　ルイス・コリー著　宮田・保邸譯　4
第一インタナショナル史（第一部）　ステークロフ著　内垣・藤三譯　6
第一インタナショナル史（第二部）　ステークロフ著　内垣・藤三譯　4
經濟學の基礎概念　史の住谷悦治著　5
ソヴイエート・ロシアに於ける農業政策　ミリウチン著　田中勝太郎譯　5
レーニンの基礎　スターリン著　野澤孝平譯　3
エルフ綱領解說　カウツキー著　三輪壽壯譯　3
マルクス經濟學大綱　ボルハルト著　田中九一譯　2
キリスト教の本質　フォイエルバッハ著　桑田悟郎譯　5
唯物論史入門　プレハーノフ著　藤井米藏譯　5
日本の知識（上卷）美術　中村亮平著　5
日本の知識（下卷）美術　中村亮平著　6
泰西美術の知識　中村亮平著　6
民族移動史　小山榮三譯　ハツド著　2
東洋の知識（上卷）美術　中村亮平著　6
東洋の知識（下卷）美術　中村亮平著　5
三民主義續篇　孫文著　金井寛三譯　中山著　4
婚姻と離婚　ウエスターマルク著　青山道夫譯　3
何をなすべきか　レーニン著　山内房吉譯　4
人生論　トルストイ著　柳田泉譯　4
文藝評論集　小林秀雄著　3
ドストエーフスキイ論　ジイド著　秋田滋譯　5
獨逸社會民主黨史（一）　メーリング著　塚本三吉譯（刊近）
獨逸社會民主黨史（二）　メーリング著　塚本三吉譯（刊近）
獨逸社會民主黨史（三）　メーリング著　塚本三吉譯（刊近）
獨逸社會民主黨史（四）　メーリング著　塚本三吉譯　7
垂統秘錄　佐藤信淵著　公夫校註　3
混同秘策　伊豆　荒畑勝三譯（絶版）
普佛戰爭史　エンゲルス著
マルコポーロ旅行記　マルコポーロ著　深澤正策譯　7
財政概論　ブレフス・リーグ編　菊川忠雄譯　4
日本社會史　本庄榮治郎著　4
マルクス・エンゲルス藝術論研究（一）　シルレル著　上田進譯（刊近）　3
マルクス・エンゲルス藝術論研究（二）　シルレル著　上田進譯（刊近）
法律哲學綱要（上）　ヘーゲル著　田村貞譯　5
法律哲學綱要（下）　ヘーゲル著　田村貞譯　5
キリスト教の起源（上）　カウツキー著　栗原佑譯（刊近）
キリスト教の起源（下）　カウツキー著　栗原佑譯（刊近）
人類學（第一部）　タイラー著　高山洋吉譯（刊近）
人類學（第二部）　タイラー著　高山洋吉譯（刊近）
階級社會の藝術　プレハーノフ著　藏原惟人譯　4
文學と論理　ローレンス著　織田正信譯（刊近）
ニーチェ傳　アレヴイ著　野上巽譯　4
非時代的考察　ニーチェ著　阿部・河上共譯（刊近）
ニイチェ藝術論抄一　ニーチェ著　井汲越次譯　3
ニイチェ藝術論抄三　ニーチェ著　井汲越次譯（刊近）
書簡集　ニーチェ著　芳賀檀譯（刊近）
ロシア文學史（上）　クロポトキン著　伊藤整譯（刊近）
ロシア文學史（下）　クロポトキン著　伊藤整譯（刊近）
キエルケゴール論　シエストフ著　中井晾二譯（刊近）

わが生涯（上）　トロツキイ著　青野季吉譯（絶版）
わが生涯（中）　トロツキイ著　青野季吉譯（絶版）
わが生涯（下）　トロツキイ著　青野季吉譯（絶版）
作家論　テヤヌ著　平岡・秋田共譯　4
スピノザ　ゲーブハルト著　豐川昇譯　4
ニーチエ傳（上）　アレヴイ著　野上巽譯　4
ニーチエ傳（中）　アレヴイ著　野上巽譯（刊近）
ニーチエ傳（下）　アレヴイ著　野上巽譯（刊近）
華山文集　藤森成吉編（刊近）

（以下續刊）

改造文庫第二部目錄

古事記　澤瀉久孝校訂（刊近）
萬葉集（上卷）　折口信夫校訂（刊近）
萬葉集（下卷）　折口信夫校訂（刊近）
古今集　吉澤義則校註　5
新古今和歌集　吉澤義則校註　5
新編源氏物語（上卷）　折口信夫校註（刊近）
新編源氏物語（下卷）　折口信夫校註（刊近）
枕草紙　山岸德平校訂（刊近）
平家物語（上卷）　吉澤義則校訂　4
平家物語（下卷）　吉澤義則校訂　5
雨月物語　山口剛校訂　2
山家集　齋藤茂吉校註（刊近）
俳諧七部集　萩原蘿月校訂　3
蕪村七部集　萩原蘿月校訂　3
伊勢物語　久松潛一校訂　2
神皇正統記　宮地直一校註　3
奥の細道　萩原蘿月校訂　3
芭蕉翁文集　萩原蘿月校註　3
曾根崎心中・心中天の網島・女殺油地獄　黑木勘藏校註　3
冥途飛脚　五十嵐力校註（刊近）
國姓爺合戰　五十嵐力校註（刊近）
大經師昔暦　樋口慶千代評註　2
重井筒　樋口慶千代評註　2
西鶴織宙（上）　樋口慶千代評註（刊近）
西鶴織宙（下）　樋口慶千代評註（刊近）
校註俳諧七部集　萩原蘿月校註（刊近）
大和物語　水野馬雄校訂　4
金槐和歌集　半田良平校註　4
大鏡　吉澤義則校註　5
然草　吉澤義則校註　3
徒萬葉漫筆　佐佐木信綱著　6
油地獄　齋藤緑雨著（刊近）
北村透谷選集　島崎藤村編　1
樋口一葉選集（一）　樋口一葉著　1
平凡　二葉亭四迷著　1

子規俳話　正岡子規著　3
子規歌論歌話　正岡子規著　3
坊つちやん　夏目漱石著　2
草枕　夏目漱石著　2
それから　夏目漱石著　3
一握の砂　石川啄木著　2
悲しき玩具　石川啄木著　1
我等の一團と彼　石川啄木著　1
雲は天才である
山陰土產その他　島崎藤村著　2
作曲白秋　北原白秋著　2
民謠集
獄中記　ワイルド著　近市子譯　2
厭世家の誕生日　佐藤春夫著　1
日輪　横光利一著　1
勞働者の居ない船　鷲山茂樹著　1
海に生くる人々　鷲山茂樹著　2
小公子　バーネット著　若松賤子譯　2
ホワイト・フアング　ロンドン著　堺利彥譯　3
はやり唄　小杉天外著　3

自選歌集　朝の螢　齋藤茂吉著　2
自選歌集　十年　島木赤彥著　2
自選歌集　川のほとり　古泉千樫著　2
自選歌集　松の芽　中村憲吉著　2
自選歌集　海やまのあひだ　釋迢空著　4
自選歌集　立春　木下利玄著　2
自選歌集　花樫　北原白秋著　3
自選歌集　人間往來　與謝野晶子著　2
自選歌集　槻の木　窪田空穗著　2
自選歌集　野原の郭公　若山牧水著　2
自選歌集　原生林　前田夕暮著　3
自選歌集　空を仰ぐ　土岐善麿著　2
作曲白秋　童謠集　北原白秋著　2
作曲白秋　國民歌謠集　北原白秋著　2
舞踊詞集　北原白秋著　2
背徳者　アンドレ・ジッド著　石川淳譯　2
チエホフ書簡集　内山賢次譯　5

鶯の卵　土岐善麿著　3
信綱文集　佐々木信綱著　2
信綱歌集　佐々木信綱著　刊近
信綱歌話　佐々木信綱著　刊近
愚庵歌集　齋藤茂吉編　刊近
芭蕉遺語集　萩原井泉水校訂　3
一茶七番日記（上卷）　萩原井泉水校訂　4
一茶七番日記（下卷）　萩原井泉水校訂　4
おらが春　萩原井泉水校訂　刊近
蟻の生活　メーチルリンク作　圓信一郎譯　3
新花摘（蘭村翁文集）　萩原井泉水校訂　2
愛すればこそ　谷崎潤一郎著　3
愛なき人々　谷崎潤一郎著　3
痴人の愛　谷崎潤一郎著　4
海へ　島崎藤村著　5
屋上の土　古泉千樫著　5
寡婦マルタ　オルゼシュコ著　渭見陸郎譯　3

句集虛子　高濱虛子著　6
井泉水句集　荻原井泉水著　5
サニン　アルツイバーセフ著　武林無想庵譯　6
一青年の告白　ジョージ・ムーア著　辻潤譯　3
一週間　リベディンスキー著　池谷信三郎譯　2
室生犀星詩集　室生犀星著　5
千家元麿詩集　千家元麿著　3
横瀨夜雨詩集　横瀨夜雨著　5
修禪寺物語　岡本綺堂著　3
少年の悲哀　岡木田獨歩著　2
運命論者　岡木田獨歩著　2
愛慾　武者小路實篤著　2
作者別萬葉全集　土岐善麿編著　6
作者別萬葉以後　土岐善麿編著　6
自傳　片山潛著　3
日本橋　泉鏡花著　5
佛蘭西家庭童話集（第一）　ボーモン夫人著　長松英一譯　3
佛蘭西家庭童話集（第二）　ドルノア夫人著　長松英一譯　5
佛蘭西家庭童話集（第三）　ペロー著　長松英一譯　3
佛蘭西家庭童話集（第四）　長松英一譯（刊近）
巴里の憂鬱　ボオドレエル著　三好達治譯　2
死の舞踏　ストリンドベリイ著　山本有三譯　2
野性の呼聲　ロンドン著　花園俊定譯　3
奈落の人々　ロンドン著　和氣律次郎譯　3
爭鬪　ゴルスウオジイ著　和氣律次郎譯　2
無名作家の日記三篇（短篇小說篇現代物1）　菊池寬著　5
出世（他廿七篇短篇小說篇現代物2）　菊池寬著　4
憑靈（他廿七篇短篇小說篇時代物）　菊池寬著　5
彼方に
噂の發生（他廿六篇短篇小說集補遺）　菊池寬著　4
父歸る（他十六篇戲曲篇現代物）　菊池寬著　5
藤十郎の戀（他廿三篇戲曲篇時代物）　菊池寬著　5
眞珠夫人　菊池寬著　6
慈悲心鳥　菊池寬著　4
新珠　菊池寬著　5
火華　菊池寬著　4
受難華　菊池寬著　5
赤い白鳥　菊池寬著　3
明暗　菊池寬著　5
禍福　菊池寬著　5
新女性　鑑菊池寬著　3
陸の人魚　菊池寬著　4
第二の接吻　菊池寬著　3
東京行進曲　菊池寬著　3
結婚二重奏　菊池寬著　3
不壞の白珠　菊池寬著　3
二つの魂・餘計者　ブリボイ著　平井肇譯　2
勝利と敗北　シエストフ著　中山省三郎譯　3
肉體の惡魔　ラディゲ著　土井・小牧譯　3
この人を見よ　ニーチエ著　小栗孝則譯　4
父と娘（他四篇）　武者小路實篤著　4
わしも知らない（他十三篇）　武者小路實篤著　4

人生雜感（感想集）武者小路實篤著 4
イブセン全集一 河野永田小寺譯 3
イブセン全集二 大山長谷部河野譯 5
イブセン全集三 中村伸木譯 5
イブセン全集四 （刊近）
イブセン全集五 大山大縣中村譯 5
イブセン全集六、七、八、九、十 （刊近）
ボルシエヴィキの手記 ピアトニツキー著 三矢譯 4
聖書物語（舊約の卷）ルーン著 神近市子譯 3
聖書物語（新約の卷）ルーン著 神近市子譯 3
洋服簞笥 トーマス・マン著 笠武生譯 2
今戸心中 廣津柳浪著 3
嬰兒殺し 山本有三著 3
芭蕉・夜船・草の詩 吉田絃二郎著 3
ドレフユース事件 大佛次郎著 3
新人國記 アー・フランス著 木村荘一譯 4
シラー詩集 小栗孝則譯（絶版）

どつこいおいらは生きてゐる！ ハツト・ラツ・アー著 瀬木慶譯 2
獄窓から 和田久太郎著 5
人波 ルツイバシエフ著 久一郎譯 3
結婚の悲劇 ルツイバシエフ著 久一郎譯 5
苦難の路（上） アー・トルストイ著 久一郎譯 4
苦難の路（下） アー・トルストイ著 久一郎譯 4
芭蕉書簡集 萩原朔月校訂 3
草雙紙選 尾崎久彌編 5
矢島柳堂 志賀直哉著 2
焚火 志賀直哉著 2
老人 志賀直哉著 2
網走まで 志賀直哉著 2
速夫の妹 志賀直哉著 2
好人物の夫婦 志賀直哉著 2
雪の日 志賀直哉著 2
暗夜行路（前） 志賀直哉著 3
短歌集 石川啄木著 4

詩集 石川啄木著 5
小說集（上） 石川啄木著 6
小說集（下） 石川啄木著 5
評論感想集（上） 石川啄木著 4
評論感想集（下） 石川啄木著 4
書簡集（上） 石川啄木著 5
書簡集（下）附年譜 石川啄木著 4
チロルの谷間（他三篇） ローレンス著 織田正信譯 4
國歌入論 土岐善麿編 3
三人 島崎藤村著 3
出發 島崎藤村著 4
新選秀歌百首 齋藤茂吉著 3
性に眼覺める頃 室生犀星著 4
多情佛心（前篇） 風見章著 3
多情佛心（後篇） 風見章著 3
苦の世界 宇野浩二著 3
山戀ひ 宇野浩二著 4

天保赤門黨 土師清著 5
血染のパイプ 甲賀三郎著 4
平妖傳（上卷） 佐藤春夫著 4
平妖傳（下卷） 佐藤春夫著 3
田園の憂鬱 都會の憂鬱 佐藤春夫著 4
自選短篇集 林房雄著 7
斬るな劍 他九篇 白井喬二著 5
大暴風雨時代 前田河廣一郎著 5
淺草紅團 川端康成著 5
女性讚 （他四篇） 片岡鐵兵著 5
喧嘩駕籠 長谷川伸著 5
角兵衛物語 長谷川伸著 5
唐人お吉 十一谷義三郎著 2
時の敗者 唐人お吉 十一谷義三郎著 4
笑ふ男・笑ふ女 十一谷義三郎著 5
或る女（上卷） 有島武郎著 4
或る女（下卷） 有島武郎著 3

星座・生れ出る惱み 有島武郎著 4
有島武郎戲曲集 有島武郎著 4
有島武郎書簡集 有島武郎著 5
有島武郎日記集 有島武郎著 4
社會詩集 ハイネ著 生田春月譯 5
戀愛詩集 ハイネ著 生田春月譯 5
放浪記 林芙美子著 （絶版）
彌太郎笠 子母澤寛著 4
神變驛香猫（上卷） 吉川英治著 4
神變驛香猫（下卷） 吉川英治著 3
女給 廣津和郎著 5
伊太利物語 ゴーリキイ著 平井肇譯 5
闇の力・生ける屍 トルストイ著 昇曙夢譯 4
蟹工船・工場細胞 小林多喜二著 4
不在地主・オルグ 小林多喜二著 4
宣言・クララの出家 有島武郎著 3
迷路 有島武郎著 3

カインの末裔・朔露 有島武郎著 2
お末の死・かんかん蟲 有島武郎著 2
旅する心 有島武郎著 2
小さき者へ・石にひしがれた雜草 有島武郎著 2
愛惜 みなほふく 有島武郎著 2
短篇集 有島武郎著 （刊近）
感想集 有島武郎著 （刊近）
俳諧續七部集 宇田久校註 4
其角七部集 宇田久校註 4
牧水歌集（一） 若山牧水著 4
牧水紀行文集 若山牧水著 4
明治大正詩史概觀 北原白秋著 4
惡魔 レールモントフ著 長谷川誠原惟人譯 3
ロシア短篇集（五月の夜） 誠原惟人譯 3
貝殼追放（上卷） 水上瀧太郎著 7
貝殼追放（下卷） 水上瀧太郎著 7
歌集鏡葉 窪田空穗著 4
すはらしい合風 金キルション著 杉本良吉譯 5

新譯我等の心 モウパツサン著 中村星湖譯 4
牧水歌集(二) 若山牧水著 4
牧水歌集(三) 若山牧水著 4
好色一代男 神谷鶴伴校註 5
チエーホフ傑作集 チエーホフ著 昇曙譯 4
人類文化史物語上 ヴアン・ルーン著 神近市子譯 5
人類文化史物語下 ヴアン・ルーン著 神近市子譯 5
青牛集 古泉千樫著 5
葛西善藏小說集一 葛西善藏著 3
葛西善藏小說集二 葛西善藏著 4
葛西善藏小說集三 葛西善藏著 4
葛西善藏小說集四 葛西善藏著 4
葛西善藏小說集五 葛西善藏著 3
葛西善藏小說集六 葛西善藏著 3
葛西善藏感想集 葛西善藏著 5
賴朝・爲朝 幸田露伴著 3

幽秘記 幸田露伴著 6
青年(上卷) 林房雄著 4
青年(下卷) 林房雄著 4
樋口一葉選集(三) 樋口一葉著 5
シユロツフエンシユタイン家の人々 クライスト著 溜野修譯 6
ヘルマン戰爭 クライスト著 溜野修譯 5
野蠻人達・敵・子供達 ゴーリキイ著 八住利雄譯 6
どん底(他一篇) ゴーリキイ著 昇曙夢譯 4
私の大學・靈人・初戀について 藏原惟人譯 6
回想 ゴーリキイ著 外村史郎譯 5
隨筆集 ゴーリキイ著 上脇進譯 4
折たく柴の記 新井白石著 伊豆公夫校註 6
ホムブルクの公子 クライスト著 溜野修譯 4
ドイツ・冬物語 ハイネ著 小堀甚二譯(絕版) 6
チエルカツシユ(他七篇) ゴーリキイ著 中村白葉譯 6

潛水艇乘組員 ブリボイ著 中垣虎兒郎譯 3
妾の半生涯 羅田英子著 4
父と子 ツルゲーネフ著 昇曙夢譯 6
色ざんげ(他十篇) モウパツサン著 秋田滋譯 3
初雪(他九篇) モウパツサン著 秋田滋譯 3
泣蟲小僧 林英英子著(刊近)
日記の中から ゴーリキイ著 溜淺芳子譯 4
蕩兒歸る(他二篇) ジイド著 藤山修三譯 2
戀をしてみて(他二篇) ジイド著 藤山修三譯 2
ブツデンブロオク家の人々(一) トオマス・マン著 吉良良吉譯 4
ブツデンブロオク家の人々(二) トオマス・マン著 吉良良吉譯 4
ブツデンブロオク家の人々(三) トオマス・マン著 吉良良吉譯(刊近)
ブツデンブロオク家の人々(四) トオマス・マン著 吉良良吉譯(刊近)
小鳥を友として ハドソン著 木村毅譯 5
靜かなドン(一ノ二) ショーロフ著 上田進譯 4

靜かなドン(二ノ三) ショーロフ著 上田進譯 4
靜かなドン(三ノ三) ショーロフ著 上田進譯 6
開かれた處女地(一) ショーロホフ著 上田進譯(刊近)
開かれた處女地(二) ショーロホフ著 上田進譯(刊近)
開かれた處女地(三) ショーロホフ著 上田進譯(刊近)
憂鬱(他四篇) ゴーリキイ著 鈴一平譯 4
新編シラー詩抄 小栗孝則譯 8
私は愛す アウヴエンコ著 湯淺芳子譯 6
瀧口入道 高山樗牛著 2
密航(他二篇) ブリボイ著 平井肇譯 3
ロビンソン物語 トルストイ著 梅田寬譯 4
風俗 石坂洋次郎著 4
童謠 川端康成著 4
悪太郎 尾崎士郎著 5
忘れ得ぬ人々 國木田獨歩著(刊近)
白き手の人々 吉屋信子著 7

自選藤村隨筆(上) 島崎藤村著 5
中村星湖編藤村隨筆(下) 島崎藤村著 5
書簡集 ローレンス著 櫻田正信譯(刊近)
異性は招く 菊池武一譯 3
エゴール・ブルイチヨフ ゴーリキイ著 杉本良吉譯 3
法王廳の拔穴 ジイド著 島崎一譯 6
ルテツイア ハイネ著 山村徹譯(刊近)
可愛い女(他十篇) チエホフ著 梅田寬譯 5
あだ花(他數篇) モウパツサン著 秋田滋譯(刊近)
脂肪の塊(他數篇) モウパツサン著 秋田滋譯(刊近)
狂人日記(他數篇) モウパツサン著 秋田滋譯(刊近)
諷刺短篇集 シチエドリン著 山村房次譯(刊近)
コサック トルストイ著 中山省三郎譯(刊近)
ガーキル博士とハイド氏 スティーブンスン著 田中宏明譯 2
死せる魂(上) ゴーゴリ著 中村白葉譯(刊近)
死せる魂(中) ゴーゴリ著 下永共譯(刊近)
死せる魂(下)

誘惑者の日記 キエルケゴール著 鈴保光太郎譯(刊近)
ハイとグレーテ シユミツト・ボン著 舘上三郎譯(刊近)
現代男 レールモントフ著 梅田寬譯(刊近)
萬葉集略解(全五冊) 加藤千蔭著 森本健吉校註(刊近)

(以下續刊)

730
126

近刊豫告

ニーチエ傳（上）	ダニエル・アレヴイ著	野上巖譯
あだ花（他數篇）	モウパッサン著	秋田滋譯
ニーチエ藝術論抄（二）	井汲越次譯	
崖山文集	藤森成吉編	
スピノザ	ゲーブハルト著	豐川昇譯
可愛い女	チェーホフ著	梅田寛譯
誘惑者の日記	キエルケゴール著	神保光太郎譯